

環境ホルモン

有坂医院 有坂 實 先生

環境ホルモンは、公式には「内分泌攪乱(かくらん)化学物質」という。つまり、私たちの内分泌系を乱し、私たちの子孫にまで悪影響をおよぼす、外界からの有害物質である。内分泌系とは、我々の生殖、発達、成長、行動などに中心的な役割を果たしているホルモンの活動の場である。

環境ホルモン問題を世界的にアピールしたのは、米国の生物学者コルポーン博士等により一九九六年に刊行された「奪われし未来」である。ハクトウワシの生殖能の欠如。ワニのペニスの萎縮(いしゆく)。アカウミガメのオスでもメスでもない間性。オオセグロカモメのメス同士のつがい。アザラシやイルカの大量死。ヒツジの不妊と死産仔ヒツジの激増。ホッキョクグマとペンギンの体内からの多量の PCB の検出。世界各地におけるカエルの減少。ヒト精子の数と精液量の減少、異常精子の増加等々。恐ろしい気味悪い事実がたくさん記載されている。

環境ホルモンの大きな特徴は、ごく微量で生物学的作用を示し、分子内にベンゼン環をふくんでおり、体内の脂肪に溶けやすく、分解されにくい。ヒトの成長や生殖を決定する細胞内に微量に存在するホルモンの受容体を、体内でつくられる本来のホルモンから奪って誤結合し、重大な障害が発生する原因となる。ダイオキシン類、ビスフェノール A、PCB、DDT、ノニルフエノールが主な環境ホルモンである。これらはプラスチック製の食器類、食品包装用ラップ、塩ビ製チューブ等の原料にも含まれている。
